

救援物資輸送訓練

5月24日(水) 市役所本庁、甲田文化センターミュージズ

本市と「災害時の救援物資輸送や配送等に関する協定」を結ぶヤマト運輸株式会社が、共に実働訓練を実施。災害発生時、救援物資を適切に輸送するため、情報共有や物資の輸送、搬入・搬出作業など手順を確認しました。



メルカリステーション開所式

5月25日(木) 株式会社ヤクルト山陽 安芸高田出張所

主催 株式会社ヤクルト山陽

循環型社会を目指したリユース活動を進めるため、株式会社ヤクルト山陽と株式会社メルカリが協働し、メルカリを体験しながら学べるリアル店舗「メルカリステーション」を開設されました。



三矢の里神楽共演大会

6月11日(日) 市クリスタルアーヂョ

主催 三矢の里神楽共演大会実行委員会

「吉田神楽団」「高猿神楽団」「八千代神楽団」が3年ぶりに開催された共演大会で迫力の舞を披露。新作の演目もあり、市内外から集まった多くの神楽ファンからは惜しみない拍手が送られました。



吉田神楽団「厳島合戦」



高猿神楽団「源頼政」



八千代神楽団「紅葉狩」

第17回安芸たかたふれあいスポーツ交流会

6月18日(日) 市吉田運動公園

主催 安芸たかたふれあいスポーツ交流会実行委員会

市内の福祉施設に所属されている障害のある人たちが、大玉転がしや玉入れなど6種目の競技を行いました。4年ぶりの今回は、ボランティアスタッフも含め200人を超える方々が参加しました。



5機関合同水難救助訓練

6月22日(木) 市土師ダム

共催 安芸高田警察署・安芸高田消防署

水難事故が多発する時季に向け、各機関の連携を強化し効果的で迅速な水難救助活動の体制確立を図るための訓練を実施。安芸高田消防署、北広島町消防署、広島県警察から安芸高田警察署、山県警察署、警備部機動隊が参加し合同で行いました。



多治比猿掛城遠望(西側日南地区から撮影)

安芸高田 歴史紀行



歴史民俗博物館 副館長 秋本 哲治

毛利元就入城500年記念 大江広元と安芸毛利氏 その5 元就の郡山城入城

今から500年前の8月10日(旧暦)、毛利元就は郡山城に入城しました。この時、既に27歳。そもそも元就はなぜ郡山城に入ったのか、皆さんご存じでしょうか？

名が語る元就の立場

今では毛利元就といえは、戦国大名として広く知られていますが、本来は毛利氏当主となるはずではありませんでした。

1497年に毛利弘元の次男として誕生し、幼名は松寿丸といいました。間もなく長男であった幸千代丸(興元)を郡山城に残して、弘元は正室と松寿丸を連れて郡山城から4km西の猿掛城(当時は多治比城)へ移りました。これは、弘元が形式的に隠居したことを示す狙いであったといわれます。その後、母と父の相次ぐ早世により、家臣に所領を奪われるなど松寿丸は非常に厳しい生活を強いられました。継母「大方殿」に育てられて成長しました。

1511年、元服して兄の興元から「元」を与えられ、「元就」を名乗りました。毛利家では元就の曾祖父「熙元」以来、当主には「元」が実名の下につきました。上に「元」がつく「元就」の名は彼が本来当主となる立場ではなかったことを物語っています。

「脇柱」が「大黒柱」に

1516年、元就にとって唯一の頼れる肉親であった兄興元が急死します。元就は死因を酒害と記しており、「祖父も父も兄も酒で早世したが自分は下戸で長生きをした」と後に語っています。

その後を継いだのは、子の幸松丸。しかし、1523年7月15日、わずか9歳で病死してしまいます。幸松丸の早世により結果的に多治比の叔父元就が家督を相続し、満願寺住職の占いにより、8月10日(新暦9月19日)に郡山城への入城が決まりました(つまり、今年も元就の入城に加え、幸松丸の没後500年でもあります)。

この時、元就が詠んだ句が「毛利の家 わしの羽を次(継ぐ) わき柱」。本来「脇柱」だった元就は大黒柱となったのです。

安芸毛利氏略系図



「早起き会」はいつから

吉田小学校では、毎年8月10日早朝に郡山城山麓の毛利元就墓所に集まり、ラジオ体操を行う「早起き会」が長年開催されてきました。これは夏休みの中間に、地区ごとに歩いて毛利元就墓所へ向かうもので、元就の郡山城入城に由来する行事です。記録上では、なんと1924(大正13)年からほぼ100年にわたり実施されています。なお、現在では小学6年生の行事として午前中に実施されています。



吉田小学校の日誌 1924(大正13)年8月10日